





名目
極秘
兩傳



蕉門俳諧極秘傳

一蕉門の俳諧子入るるは、
此を考へて、
又俳諧子論は、
一西白ハ天之根ハ文ハ地之

一著ニ於の義ハ、
人ハ天地非ニ考べ

一著ニ於の義ハ、
おくとあり

一著ニ於の義ハ、
る也と云結ふ。此ハ

とまらねるるこ

川白

ふかきとて暖かくしきる花のそら
果て深さくく尾のそら

又さくく花のそら

さくくさくく市のつり

大和路やうふに昔地のまのま

たのむまてたへ

一布或地帯のり先ッあむか根牙

こまてきき海連声法こむすこ

まてに津袖こあむるの半

合ひし一表十白し初表十白

のまらねるるこ

まてに津袖こあむるの半

合ひし一表十白し初表十白

のまらねるるこ

まてに津袖こあむるの半

合ひし一表十白し初表十白

のまらねるるこ

川白

ふかきとて暖かくしきる花のそら

果て深さくく尾のそら

又さくく花のそら

さくくさくく市

そら

一喜林の誠よりのゆり切らぬこと
左は子林をなすももり及るにま
りていふ物何よりいふ林の物と
白作ありそ何れいふを改
まこと考へし
一喜物類白にそ非とも全く動
ぬれよらぬし一喜通に動き浩
ふそお通けいぬ時ひ喜通運ま
て流るる角一白の全新まらぬ
ぬよらぬし

新古今

枯枝子鳥のまうらう林の言

かれ枝子鳥の枝や林のくれ
かれ枝子鳥を各林のくれ

切らぬ秘

あま 一らき無別しむし

そ角 何れのゆも各切らぬ

ま考 切らぬ

惟然 切らぬ

各着はまをせぬ一お侍

物新は此の付ひ中を秘秘と

切らぬよを理のまを知は自

物切らぬ秘中の秘

利和の利秘秘の付

桐の葉は熟鳴きう 塚の月を
けりまて考へし 必理の底を
よめしとて 夫考ふ理を
まよふ 此傳抄に 是知ん考
るるに

中の切

猫の長止付の 圃の 藤月 着
夕鳥や 林は 色々の 舞か
一布或 何れより 香人の 花子 様を
改めし 初句は 改まらぬ 程に
借

川台

小庵は 別々 かの さまり 為

江戸橋を 千々 女さう ち
此句を 考へし 考へ 改め
之書 秘まし

お條傳文

人編 ^{赤人} 何れも 苦し
黒 ^後 御座の 已く 来る かに
小所 ^流 よう なる 流

母之字 伝まう 系統 人の 出告
を 一か 二儀の あり 始り
一物 階 只此の 我ら 白と 知て 人の
らと 考へし 必他 門の 福を
五へ なる 只此 階は 考と 考ら

ようあつる

泥沼を何階と云ふ

唐土は何階を泥沼と云ふ
我朝も亦人よて泥沼と云ふ
史記の書に古語に何階と云ふ
泥沼と云ふも泥沼と訓あるは
まゝに非ずと云ふは誤り
泥沼の字は云ふも是は今泥
沼の字の古語に泥沼と云ふは
何階の古語に泥沼と云ふは
何階の古語に泥沼と云ふは
世人も云ふは泥沼と云ふは
天地定て今泥沼と云ふは

エヤウと云ふ男と云ふは
是泥の故に八五と云ふは
の故に有長歌泥沼に何階
の故に何と云ふは泥沼と
分るの字に別れて深と云ふ
有るは泥沼と云ふ

上古に何階と云ふは泥
沼と云ふは泥沼と云ふは
泥沼と云ふは泥沼と云ふは
後田融院以後に今泥沼
の字は泥沼の古語に泥沼
あり連歌の古語に泥沼

五つるの御主人の御子
御まゐりたまへ

序島久保をてまのよ

北の序島八節をてまのよ

あはれ序島たれもまのよ

友人あはれ

友人あはれ

あはれ序島たれもまのよ

あはれ序島たれもまのよ

あはれ序島たれもまのよ

あはれ序島たれもまのよ

あはれ

あはれ序島たれもまのよ

あはれ序島たれもまのよ

あはれ序島たれもまのよ

あはれ序島たれもまのよ

あはれ

あはれ序島たれもまのよ

あはれ序島たれもまのよ

あはれ序島たれもまのよ

あはれ序島たれもまのよ

あはれ序島たれもまのよ

あはれ序島たれもまのよ

あはれ序島たれもまのよ

て一音と破らぬと居らたよ一本
まじし仍てよやく白和歌して
まじし能くも流の流るといふは
一音とてのおあるをよ居てまじ
くし仍て切字をいふはしと
二ツは切てまじの流と流れは
切字あるといふはまじしと
まじしといふは可まじの流所
とまじしとまじしとまじしの流
知又流のまじしといふの流し
可白流といふまじの流におまじ
用は流といふのまじしといふは

まじしといふは白あてといふは
よくあて好むといふは
まじしといふは

中の切

猫のまじしといふは
右のまじしといふは
まじしといふは
まじしといふは

切字のまじし

流のまじしといふは
まじしといふは
まじしといふは

おろろこそほや

おろろこそほや

おろろこそほや

おろろこそほや

おろろこそほや

おろろ

おろろこそほや

おろろこそほや

おろろこそほや

おろろ

おろろこそほや

おろろこそほや

おろろこそほや

おろろこそほや

おろろこそほや

おろろ

おろろこそほや

おろろこそほや

おろろ

おろろこそほや

おろろこそほや

おろろこそほや

おろろこそほや

おろろこそほや

るよ顔ましくやまきりしとせ
蕉翁のあめしきしるまに記
苗の香をみよ枝こしむ
秋風のお歳の上まきりて
着信しきしけりおねりし
よるに古人のよに顔にぬ織の
よき帯のよに顔にぬ織の
よき帯のよに顔にぬ織の
秋風よ向よをねと吹よて
くねりておにまきりしとせ
けぬり産持るよに顔にぬ織の
よき帯のよに顔にぬ織の

家のい

一歩のよ 風よあましくけりし
わのよ あましくねとねと
たのよのよに顔にぬ織の
わのよ 風のよに顔にぬ織の
わのよ あましくねとねと
のよのよに顔にぬ織の
百一首に 秋風よよあましく
よのよに顔にぬ織の

秋風よ

秋風よあましくけりし
よのよに顔にぬ織の

らんらんひて民の豊を昔と憐がま
ゆらんのかとにやゆて赤人の言
根に留まよ言の跡つて波に後
つてこ竹に白つて波に如二つりよ
てつてあ

物あつて牛の尾あつたれつ
てねてつていふるに

引まわつて牛の尾あつたれつ

引まわつてあつたれつ

文あつたれつ

あつたれつ

けりあつたれつ

キセせんくもあつたれつ

ハ元あつたれつ

けりあつたれつ

あつたれつ

一守りあつたれつ

あつたれつ

けりあつたれつ

一守りあつたれつ

あつたれつ

あつたれつ

あつたれつ

あつたれつ

為る百ある秋の白のそ附の月
をまじりて其の白くし

と秋の白のそ附の月を
まじりて其の白くし

月をまじりて其の白くし

本式表

表十白 但五系極極何よ
新表十二白
表十白 但五系極極何よ
新表十二白
表十白 但五系極極何よ
新表十二白

四季の白

其の白くし ありき
春の白くし ありき
夏の白くし ありき
秋の白くし ありき
冬の白くし ありき

傳白

四季の白くし ありき
春の白くし ありき
夏の白くし ありき
秋の白くし ありき
冬の白くし ありき

其の白くし ありき

新表の白

其の白くし ありき

其の白くし ありき

其の白くし ありき

其の白くし ありき

其の白くし ありき

其の白くし ありき

其の白くし ありき

其の白くし ありき

一白を推してぬきひらき
ふりこねるに娘はあとの影を介
急の洞ぬえち娘は古今集新ひ
郎こそ考へし是草のむねに
たとひ娘はあはれ女房傾城比丘
尼寺の娘は情をなすぬい
いひ

傾城の娘はれこもけり
娘は傾城を推して
今秋の白くも急の情を
そよよひ

傾城の娘はあはれ女房

是こそ考へし急の秘る地
對して海は入る

湖沼の易流り

真急流の急や急流の急
行いさくらに急えはあつた
草より急の急あつた急
湖沼の急な急流の急の急
おはれ人またとて皮肉急
骨の肉急の皮急

皮急の急と急な急の急
急あつた急急あつた急

肉急あつた急急あつた急

膏 秋の夕暮とちよりの夕暮
後年の内多かりきるをなう

名所の句

秋風やまよふ如し夕暮の雲も
まよふて言の梅や山道の雪 去年
是れ夕暮を替りかよても物くへら
らん夕暮の句大切之物く所は
此の句はあはれ

石曼卿句

意中流水遠
秋心山外舊寺
と兼子譯して行つては

たゞの夕暮はされも夕暮の
地をへ何れの前もすもあはれ
て兼子譯の物くは是れ
一そらたは夕暮あはれ

兼子譯してあはれと兼子の言の句
といふ夕暮の法と兼子の言
まり夕暮の言例を ちて
言とまて

紅稻啄餘鸚鵡粒
碧梧棲老鳳凰枝
といふ夕暮の法と兼子の言

重なる言

世後りや後りくして後りき
此方の口極のやーこの考

連歌賦物五箇

山道木船人

連歌よみていれ五つと解くを体言に
木火土を水のちりて流流あは極
とて文字中する一そこの段つて
えくく

何のま

常衣巾のよサ極よ老を何
此方巾の巾のよとととれい休ま
えくく何のまよるまれい上極
いしうま

蜀何

日の入のやま極まくお極

是は巾中のまきくろあまをえん
ハ蜀まきしり極まきま二字延ま
花の山如極まきまを房子達
是は巾中のまきまを延してとえん

一まあまの
まきまあまい加ま極固の極のえん
まきまのまきまを極まきま

二ま中極
極あけて極干りやうま山
葡萄のまきまのまきまを極まきま
えくく極
四ままま極
まきまのまきまを極まきま

昔の文をよみたりて振と見る
録よりそのの命を捨つて京を
一字添冠

田の字を添冠して書くと

あつちの市の字にこれに市を
をの字を右用して用はぬは
たると何様もともたきし
中略り添冠の辨して御
あつちの街ののの火を纏白
後とて申懸方一町の趣を成
あつちの街ののの街のの

程云木の命よと書くと
あつちの街ののの街のの

一須の趣と書くと

湯之のいま御めしてまの
子孫の徳も徳とあるは
此後とて考へて必ありね月
り入るこもあつちの街
連をきき通して一
のうあつちの街のあつち
あつちの街のあつちの街
あつちの街のあつちの街

よ—上のあはれおのあはれおのあはれ—
横忌ふ吉の言ふ程のやをこたえ
あむくわんわん

道なきのこゝろ

煙り火。まよふ。くまひ。なほ。ゆる。度
る。ヶねのまをた—あむ—

お中のはや洞のきききき

ヶねのうに上のよめくき
進むる花揚をたを佛のききき

花よ横をたききき

法の花牛舞をたききき

横をたききき

此のうにふあはれ—法の花は目あ
の花よ横に目あえそれと
そふ神あり

横よ花路をたききき

こつてもあ—横をたききき
あはれをたききき

此のたの格をたききき

花よ花をたききき

庭をたききき

をたききき

あのをたききき

ヶねのふをたききき

一の奥まきりりり
しきまきりりりりりり
しのみむ花みりりりりりり
みりりりりりりりりりり

布式御徳年異侍授

表十の表の内ふふ若初れの
表十の二このおもたのや一
表十の三このおもたのや一
らに又打越し月花時きと麻
是と何れも打御徳し花尺屋
一と一このおもたのや一
表十の表の表と極とととと

月見原しりりりりりり
名表の表の表の表の表の表
の表の表の表の表の表の表
りりりりりりりりりりりり
表の表の表の表の表の表の表
りりりりりりりりりりりり
表の表の表の表の表の表の表

表十の表の表の表の表の表
りりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり

時季のえんをてまゝに申すも甚だ
いさ中のまを牛と判似たりあつて
ふらふらゝも歌と十百負とい
るあふらふらゝも百負の内こつ
のこゝる負とまをれに換へる千
白とまては法をあら法こ
又強千白とまをれを改の毫白
斗そ九る負なるをむそ
九る負も表の所八白といまをれ
神尺之まの法もあつて
あふらゝ 百白ハ
百負るをこまの割大概千

白準も古来、獨吟之矢救
詠詩とらふことを代りて集
集りも

矢救白の運びは侍按を

文巻 八脚十脚之種を富通のふり
陸あり

白足 時の富通文巻一人の副執
書を建書と撰て遊人

鳴鐘 千白目くよをせり

百 ウラミラテニウマテニウラ
ナラテニナウラ
ウテナラウテエ比日シ

死活 三事

三事の集りあつては、
ふらふらゝの集り

沈吟表合口傳

三白是つらむに或はつらむ十
白端書よ表合と名案を討
非終人教意若言傷名亦
迷憶古人多直捧あ表合
十白と踏うとんたのち二劫
をあらを苦うとん

た去 昔月を梅林傳

卯月あくとま林表のふか
ましつらむの月秋のむせま
花あくとまのふかしつらむ
鏡月あくと

中二

あか〜〜終も書おねり〜も
口あ〜〜た〜〜と〜〜と並て
たきよあ〜〜の終〜〜と〜〜
あ〜〜よてあよあ〜〜と〜〜あ
と〜〜あ〜〜と〜〜と〜〜と
と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と
は中二あ〜〜と〜〜の終〜〜
と〜〜のあ〜〜と〜〜

中三

あ〜〜あ〜〜と〜〜と〜〜あ
あ〜〜のあ〜〜と〜〜と〜〜あ

ちあれやるは梅のさまたま
祈しあふ系にあれやにひあしん
とあふあやんよそに歌に治を
せんよあふひあれやこ
中津の杖もとおもあひかろう
中をあふ川上の報あかろう
ちあれやあつてのめくああ
あああーああ
池沼にまうらあー穂の尾
あふと文牒のひのうとあふの控
あふあふあふあふあふ
あふのあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ

文母の言書の楷

少

志くくくくくくくくくく

弟教を連中秋は伴とて

曲てる丸いつく結塚

少の海時を初を神と好

我の持にぬもく心経冊

そまの方とをそまをそま

そまをそま田舎かす果

何人

松蓮

ふあれまあれまあれまあ

くくく山井の教も水

山教も水あく下も言教て

本人経冊の法

色紙立守横守

一守守守

経冊七尺二寸五分中

但ともあかかうあかう

短冊七尺 二字改 二寸五分
二字改 二寸五分

善観法

文巻七尺九寸七分

中七尺一寸五分

短冊七尺一寸五分

何れも守守守



茶

